



# カトリック六甲教会 教会報



## 2017年四旬節教皇メッセージ

「みことばはたまもの、他の人々はたまもの」

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

四旬節は新たな始まりであり、復活祭という確かな行き先、すなわち死に対するキリストの勝利に向かう道です。この四旬節は、わたしたちに回心を強く求めています。キリスト者は「心から」（ヨエル書 2・12）神に立ち返り、通常の生活に満足せず、主との友情のうちに成長するよう招かれています。イエスはわたしたちを決して見捨てない忠実な友です。たとえわたしたちが罪を犯しても、イエスはご自分のもとにわたしたちが戻るのを忍耐強く待ってくださいます。そのように待つことを通して、イエスはご自分のゆるす意志を表しておられます（ミサ説教、2016年1月8日参照）。

四旬節は、教会によって示された断食、祈り、施しという聖なるわざによって霊的生活を深めるのにふさわしいときです。みことばはあらゆるものの礎です。この季節の間、わたしたちはさらに熱意をもってみことばに耳を傾け、熟考するよう招かれています。

<中略>

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、四旬節はみことば、諸秘跡、そして隣人の中に生きておられるキリストと新たに出会うのにふさわしいときです。荒れ野で 40 日間過ごし、「悪魔」の誘惑に打ち勝った主が、わたしたちのたどるべき道を示してください。わたしたちが真の回心の道を歩めるよう、聖霊が導いてくださいますように。そうすれば、わたしたちはみことばというたまものを再び見だし、自分を盲目にする罪を清められ、困窮している兄弟姉妹の中におられるキリストに仕えることができるでしょう。こうした霊的な刷新を、世界各地の数多くの教会団体が行っている四旬節キャンペーンに参加することを通して明らかにし、唯一の人間家族における出会いの文化をはぐくむようわたしはすべての信者を励まします。互いのために祈りましょう。キリストの勝利にあずかることによって、わたしたちが弱い人々や貧しい人々に自分自身の扉を開くことができますように。そのときわたしたちは、復活祭の喜びに満たされて、あかしすることができるのです。

バチカンにて

2016年10月18日 聖ルカ福音記者の祝日

フランシスコ



## ナルドの花たより

聖書の中で主は何度、移民や寄留者を受け入れるよう命じているでしょう。

私たちがまた寄留者であることを再認識させられます。

How often in the Bible the Lord asks us to welcome migrants and foreigners, reminding us that we too are foreigners! (2月19日)

キリスト者の心にはいつも喜びがあります。いつもです。

その喜びは、賜物として受け、皆と分かち合うために保っているものです。

The Christian heart is always full of joy. Always.

Joy received as a gift and kept in order to be shared with everyone. (2月24日)

大齋（断食）とは、単に食事を控えることではありません。

飢えている人と食事を分かち合うことでもあるのです

Fasting is not only about abstaining from food.

It also means sharing food with those who are hungry. (3月4日)

カトリック中央協議会 教皇フランシスコのツイート（邦訳）より



## 2016年度第5回小教区評議会議事録

- ★ 日時 : 2017年3月12日（日）12:00～13:00
- ★ 場所 : 信徒会館 第4会議室
- ★ 出席者 : アルフレド主任司祭、議長団、評議員、その他関係者

1. 主任司祭挨拶
2. 協議事項

(1) 六甲教会の現状と10年後を見据えた取り組みに関するアンケート結果について

3. 報告事項

- (1) 東ブロック会議報告
- (2) 各部の2017年度活動方針
- (3) その他各部、各会からの報告

次回 小教区評議会 : 5月14日（日）12:00～ 第4会議室



## <行事報告>

### ユスト高山右近列福式（2月7日）

#### 「マルチリヨの心得」とユスト高山右近の殉教

さる2月7日、ユスト高山右近の列福式が大阪で行われました。

殉教者の列福であるため、当日、祭服の色は赤でした。

カトリック教会は殉教者の記録を「血の文字で記された真理の記録」

（カトリック教会のカテキズム2474）とみなしているからです。ところで「殉教者＝信仰のために血を流した人」と定義するなら、迫害されはしても血を流さなかった右近の場合、なぜ殉教者と言えるのでしょうか？また、マニラに追放されたとき右近は自分の身に起きていることを殉教と自覚していたのでしょうか？17世紀初頭の写本の残る、「マルチリヨの心得」というキリシタン文書を手がかりに、そのことを考えてみたいと思います。

1590年、天正少年遣欧使節を伴って再来日したイエズス会巡察司ヴァリニャーノは、宣教の道具として活版印刷機を携えてきました。それに先立つ1587年、豊臣秀吉が「伴天連追放令」により宣教を禁じたため、当時の宣教師や信徒たちは殉教を覚悟しなければならない立場に追い込まれていました。1591年、宣教師たちの潜伏先、加津佐（現在の南島原市）で「サントスの御作業の内抜書」という初期教会の殉教者を中心とした聖人伝が刊行され、その後半で殉教の意義が説かれます。

また1595年刊「イエズス会日本コレジヨ講義要項」の第3部、「真実ノ教1」で「マルチル（＝殉教者）」の定義が仔細に論じられています。例えば、殺されるのをみすみすみ知りながら敵に身を渡しても、それが信仰のためでも隣人愛のためでもなければ殉教ではなく、（自殺に等しいので）単なる大罪である、といった具合です。

1590年代に原本が出版されたと思われる「マルチリヨの心得」はこうした教会の教えを纏めた写本で、棄教を迫られ、判断を仰ぐべき司祭や修道士が近くにいないときどう振る舞うべきかのガイドブックだったのです。

最初の3章では、信仰の否定を固く戒めた上で、罪を犯さず殉教を回避する方法（逃走、潜伏など）も助言されています。

この書の第4章「丸血留に成ル程ノ難儀出テ来ルニ於イテハ如何ニスベキゾトイフコト」（殉教者になるほどの困難に陥ったらどうするべきか）で、殉教の詳細な定義が述べられます。定義の第一は「丸血留ニ成ルニハシスルノコト肝要也。」とあり、命を捧げることが第一条件なのですが、その処刑法は斬首や焚刑、磔刑に限定されるのではなく、餓死の強要や、流刑中の死（「流罪ニ行ハルタ内ニ死シ」）、獄死など、どんな場合でも艱難辛苦によって死ぬ者は皆、殉教者であるとされています。それに処罰を快く耐え忍ぶこと、死罪となる理由がキリシタンであるか、人に善行を勧めたまたは悪行を避けた故であること、迫害者に抵抗しないこと、殉教の前に赦しの秘蹟を受けておくこと（それが不可能なら心の底から痛悔すること）、等々の条件が加わります。右近の場合は「流刑中の死」にあたるのが明白で、当時、右近も目にしたはずのこうした文書によって、自分の道が「デウス（＝神様）へのご奉公に対して呵責を受け、命を捧げること（1595年版、「羅葡日対訳辞典」による「マルチリヨ」の定義）」に通じていることを自覚していたものと思われます。

また、右近は1614年のマニラ追放に先立つ1587年にすでに、「現下我らが直面しているのは、悪魔との戦いではないか。この戦いで死ぬことはキリストとともに勝利者となることであり、この徳行



によって、キリストの家族である当日本の教会は庇護されるのである。」(フロイス「日本史」第2部103章)と、殉教の決意を語ると共に、自らの殉教が未来の日本の教会の柱石となることを意識していました。

列福を機に、現代の私たちは右近をはじめとする日本の殉教者たちに敬意を表しつつ、彼らから継承し、未来へと伝えていくべき信仰の遺産に、私たちの時代は何を付け加えることができるかを深く考えてみたいと思います。( 宣教部 荏原 )

※ 参考文献：尾原悟編、「マルチリヨの葉」、『きりしたんの殉教と潜伏キリシタン研究第43号』所収、教文館2006年

## 聖歌隊員として参加して

昨年10月に高山右近生誕の地巡礼に参加してからずっと心待ちにしていたその日が来ました！六甲教会からは約85名が参加し、うち聖歌隊15名は9時からのリハーサルに間に合うように、朝早く家を出て8時すぎに大阪城ホールに着きました。聖歌隊専用入口には女子高生や各地の教会から集まった大勢の聖歌隊の人たちが開門を待っていました。



ホールの中に入ってびっくり、幅50m奥行100m以上もあろうかというフロアーには立派な祭壇と座席が整然と並べられ、祭壇の裏側の観客席のうへの方には944名の聖歌隊席が用意されていました。

リハーサルはオルガンや82名のフルオーケストラの伴奏で、練習していた曲の音合わせが行われました。聖歌隊席からオーケストラ席までは100mほども離れていてエコーが心配でしたが音響設定が完璧で、ほとんどズレることなく聖歌隊の指揮にぴったりと伴奏がついてきたのには感心しました。

休憩のあと12時から開式です。一万人近い座席が参列者でいっぱいになり各地の司教、聖職者344名が脇から入場、中央通路からはマニラのタグレ枢機卿他4名の大司教による共同司式者と主司式の教皇代理アンジェロ・アマート枢機卿の行列が祭壇中央に上がり、その右側には14名の日本の司教、左には韓国からの7名の司教やカンボジア、東チモール、ルクセンブルグなど海外から来られた総勢14名の司教の列が揃いのシンボルマークのついた真っ赤な祭服で整然と並ぶ中、開式の鐘がなりました。

入祭の歌は「いつくしみ深く 御父のように」Misericordes sicut Pater！いつも歌っていた聖歌ですが今日のミサにぴったりです。キリエはラテン語のグレゴリオ聖歌、その後のお祈りや賛歌も懐かしいラテン語と日本語が併用されて厳かに進みます。

メインイベントは右近の列福を宣言する教皇の書簡の朗読と肖像画の除幕です。大きなスクリーンに右近の姿が現れ、アレルヤに続き「主こそわが光 一祈る右近」の賛歌がオーケストラの伴奏で会場いっぱいに広がりました。日本の司教団を代表して高見大司教の感謝の言葉があり、栄光の賛歌が歌われ、ことばの典礼では右近が残した信仰の宝についてアンジェロ・アマート枢機卿の説教がイタリア語で行われ日本語で通訳されました。

共同祈願は韓国語、日本語、英語、ベトナム語の順で右近に倣う祈りがそれぞれの国の言葉で捧げられ、右近が辿った旅先でも多くの人々に讃えられたことが分かりました。奉納の歌はフィリピ

ンのタガログ語で歌いました。

聖体拝領は大勢の司祭が客席まで持って来てくださったのでわずか 15 分くらいで終わりました。その間に日本語、ベトナム語、韓国語、の聖歌を歌いました。

閉祭のことば 「高山右近のように信仰を力強くあかしするために、行きましよう平和のうちに」「神に感謝」と唱えそのあと司式者の退堂です。中央通路で司教団の列の最後をゆっくりと手をふりながら時には客席に近寄り、求められれば握手をされるアマート枢機卿のお姿がとても印象に残りました。聖歌隊が歌う「テ・デウム」と高山右近のイメージソング「迷いを捨てて」を最後に 2 時間 30 分に及ぶ荘厳な列福式は滞りなく終わりました。

高山右近列福ミサに参加できた喜びを神に感謝しながら帰路につきました。参加できなかった人のためには全世界にインターネット発信された同時中継の映像が YouTube にあると聞いて帰宅後「高山右近列福式 YouTube」で検索し式典の全てを見ることができました。聖歌隊の席が祭壇の裏側だったので正面からの祭壇の様子を知るのに大変役に立ちました。またその映像の解説を 26 聖人記念館館長のレンゾ神父と「主こそわが光・・・」を作詞作曲されたシスター前田智晶の名コンビでされており、これがまた素晴らしい。参加できなかった方はぜひご覧になって高山右近列福ミサを体験なさってください。私はもっと福者右近のことを知らなければ……………。（鈴木）

## ユスト高山右近列福式に参加して

お告げの鐘が鳴り、「ミゼリコルデス シクト パーテル」—入祭の歌が満場に響き渡るなか、掲げられた十字架のキリスト像に次いで赤い祭服の司教団の長い列がしずしずと入場、場内が一気に荘厳な空気に包まれました。

“キリーエ エイソン” —あわれみの賛歌に続いて列福の儀が始まりました。岡田大司教が厳かにユスト高山右近の列福申請を口上、それに答えて教皇代理アンジェロ・アマート枢機卿が清らかなお声で教皇書簡を朗読—「ユスト高山右近を私の使徒的権威によって福者の列に加えます」—列福宣言です。これぞ 400 年を経た歴史的瞬間、この場に立ち会うことができた参列者一同に感謝の輪が広がりました。



主司式アンジェロ・アマート枢機卿によるミサでの説教は胸を打つものでした。ユスト高山右近の信仰と殉教について丁寧に熱く語られたのです。多くのお言葉のなか「主に従う人は とこしえに記憶される」が、ユスト高山右近を讃えるお言葉として私の心に残りました。

キリシタンが迫害を受けた戦国時代、あの乱世の舞台であった地に立つ大阪城ホールで、苦難に耐え信仰を貫き通した殉教者を顕彰し祈りを捧げることになるとは、歴史の不思議な巡りを感じざるを得ません。

ユスト高山右近殉教の地マニラから来られたルイス・アントニオ・タグレ枢機卿をはじめ、列福式ミサは、アジアを中心とした国際的な編成で進行しました。また、インターネットでライブ発信されていたとのこと。世界中の人々にも感銘のメッセージが届いていたのです。このメッセージが世界平和の礎となりますように。切なる願いです。

“キリストの光を まぶしいほど受けて 右近は祈る 祈り続ける” —長崎を出て荒波の海路を南に向けて行く福者ユスト高山右近の御姿を脳裏に描きつつ祈りを捧げます。（川村）

## <行事報告>

### 祈りと音楽の集い（2月26日）

#### ——カメラータアンサンブル演奏会——

2月26日（日）午後2時から「声楽アンサンブル・カメラータ神戸」の演奏会が主聖堂で開かれました。

カメラータ神戸は創立22年、毎週火曜日、当教会イグナチオホールで練習を重ねています。また年末には、恒例となった当教会でのメサイアコンサートをリードしてきました。



このたびの「祈りと音楽の集い」は初めての出演です。250名近い聴衆が集まり、美しい衣装をつけてメンバーがしずしずと入場、指揮は鼓呂雲由子さん。

第一部は由子さんの夫君・作曲家エリック・コロンの作品を中心に、とくに阪神淡路大震災の犠牲者への鎮魂を込めた「ルックス・イン神戸ミサ」、長崎浦上天主堂の「被爆のマリアに捧げる賛歌」など心を打つ作品が演奏されました。

第二部では名曲ペルゴレージの「スターバトマーテル（悲しみの聖母）」（抜粋）が演奏され、合唱と器楽が美しいハーモニーを聴かせました。

最後に会場のみなさんと一緒に「アメイジング・グレース」「あめのきさき」を合唱して閉演。あと、イグナチオホールでの交流会に話がはずみました。

次回の「祈りと音楽の集い」は5月21日（日）14時から、林裕美子さんのソプラノ演奏会です。ご期待下さい。  
(音楽チーム)

---

## 《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします。

### 📧 地区会

4月9日（日） 12:00 役員会

### 📧 典礼部

4月29日（土） 10:00 部会

### 📧 教会学校

4月8日（土） 入学式

4月23日（日） 初聖体・祝福式

### 📧 施設管理部

4月30日（日） 12:00 部会

---

## 《お知らせ》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです。

### ◆ 社会活動部より

4月5日（水）10時 手芸の集い（第1、第2会議室） どなたでも参加ご自由です。

4月8日（土）10時 炊き出し（イグナチオホール 台所）

小野浜グランドにて、おじさん達のお話相手や配食だけでもOKです。

4月21日（金）10時30分 2017年度第1回社会活動部連絡会&親睦会（第1、第2会議室）

4月24日（月）9時30分 ともしび会 施設の子どもたちへのケーキ作り（イグナチオホール台所）

## ◆ 墓地っこ便り

2月26日 真冬を忘れるような好天に恵まれ、滞りなく墓参と納骨式が行われました。今回は納骨者13名、名盤への新刻銘者16名(含生前刻銘者)でした。

また、納骨者及び生前刻銘者の名盤への刻銘が3月28日に完成いたしました。ご確認ください。尚、共同墓地納骨室の拡張工事は無事終了しました。今後10年以上のスペースは確保できました。

次回の墓参は2017年11月5日です。

(墓地委員会 SF)

## 《 イグナチオ喫茶からのお知らせ 》

多くの信徒の皆さまの交流の場として、イグナチオ喫茶は毎週日曜日開催するようになって3年目を迎えることになりました。温かいご支援有難うございます。今年はいくさんの方々の協力のおかげで教会に寄付することができました。



## 《 図書室からのお知らせ 》

図書室に入った本(3月)

ある方からいただきました。

☆ フィロカリア ΦΙΛΟΚΑΛΙΑ Ι~Ⅸ — 東方キリスト教靈性の精華 — 新世社

フィロカリア=美への愛 真・善・美 すなわち神への愛を…

フィロソフィア(哲学)の営み…じっくりと往昔の靈的師父の心の内奥を透視して…

一人ひとりのところに精霊の照らしを得、日々の靈的精進の糧にしていきたい。

… (Ⅸ あとがきより)

ギリシャ語からの邦訳 全9冊



## みんなの広場

### 炎 — ミッション —

マリア様が神の母だと知らなかった頃、マリア様はなぜ「あの子の代わりに私を十字架につけて」と飛び出さず、十字架の下に留まることがおできになったのかと不思議でした。

やがてシメオンやアンナと同様、イエス様がどなたであるかご存知のマリア様は主イエス様に従われたのだと納得し、心臓を貫かれる思いで十字架の下に佇んでいらっしやっただのと思いました。

やがて、マリア様(と少年ヨハネ)は、そこで神様の救いの方  
法をご覧になったのだと気づきました。寄り縋る人がいればただ  
抱き留め、けれども決してイエス様から目を離されることはな  
かったでしょう。十字架につけられた罪人を救うのも(神性)、イ  
エス様が「すべてのことが今や成し遂げられたのを」お知りにな  
った(人性、と私には思われます)のも、何も見逃さず、「婦人  
よ、御覧なさい。あなたの子です」(ヨハネ19:26)とすでにミ



ッションも受けられたマリア様は、イエス様の肉体はどのような状態であっても、ただ主のお力に、その偉大さに、すべてに圧倒され、その中であって、ただもう恍惚と神を崇め、神を讃えていらしたのでは、と思うようになりました。心臓を貫かれたまま。

傷つき、血だらけで絶命されたイエス様に、でもマリア様は決して「敗北」や「惨めさ」をご覧にならなかったでしょう。イエス様のご誕生に先立って、エリサベトと共に救い主の誕生を喜ばれたのと同様、だれよりも先にご復活の希望をお持ちでしたでしょう。

この世の地獄ともいえるアウシュビッツ。しかし、餓死室をコルベ神父様は祈りと歌声でご聖堂のように変えられたと聞きます。貧困、紛争、奴隷、テロ—この世には多くの闇があるでしょう。「神はどこにおられるのか」と嘆きたいこともあるでしょう。けれども心臓を貫かれるような苦しみの中で、わたしたちは悲惨さの中に主の偉大さを見ることができましょう。同時にミッションを、コルベ神父様のようにこの世の地獄を天の一室のように変えることを委ねられているのに気づくのでしょ。そのとき、例え表面はどれほど苦しくとも、わたしたちは主の平和の裡にいることを知るのです。

主よ、

私たちが、今祈ることができない人のために、祈ることのできるものでありますように、そして、祈ることができないとき、祈ってくださる方のいることを忘れることがありませんように。

真の奇跡は魂に起こることを、私たちが主の僕/婢として喜んで生きることによって、伝えていくことができますように。

血みどろのイエス様の美しさに寄り添い、主の内に炎のように燃えるものでありますように。

(マリア 塚)

## “Resurrexit”

単刀直入、嘗て復活主日「日中のミサ」の入祭唱はこの一言で始まった。

今は観想修道院でなければ与れないだろうが、復活祭の典礼は「復活の主日・復活の聖なる徹夜祭」とされるように、土曜日から日曜日にわたって夜を徹して行われる典礼である。そして、日が昇るとともに改めて救いの成就を祝う。ともすれば“クリスマス”の影に入ってしまう“過越の三日間”、とこの日を、聖暦年のクライマックス、中心をしっかりと心に刻み込んでおきたい。

(ヨハネ 三好)

### ◆ 四旬節のお知らせ ◆

4月 2日(日)	四旬節第5主日
4月 7日(金)10時	十字架の道行き、初金ミサ
4月 9日(日)	受難の主日 10時のミサで枝の行列を行います。
4月12日(水)	聖香油ミサ(11時カテドラル)
4月13日(木)19時	聖木曜日 主の晩餐のミサ(洗足式)
4月14日(金)19時	聖金曜日 主の受難の祭儀
4月15日(土)19時	復活徹夜祭
4月16日(日)7時30分、10時	復活の主日

### 編集部員のつぶやき

今回初めて編集作業をし、頂いた原稿の量に圧倒されました・・  
紙面が充実するのは、嬉しい限りです。わかりやすく配列し、たくさんの方に  
楽しく読んで頂けるよう、努めたいと思います。これからもよろしくお願い致します。

(岩田)

教会報5月号の発行は4月30日(日)です。 原稿は4月16日(日)までに教会受付へご提出 ください。 FAX及びメールでも受付いたします。(広報部) <a href="http://www.rokko-catholic.jp">http://www.rokko-catholic.jp</a>	カトリック六甲教会	
	657-0061	神戸市灘区赤松町3-1-21
	電 話	078-851-2846
	F A X	078-851-9023
	発行責任者	アルフレド・セゴビア
編 集	広 報 部	